

(座談会)

協議会とともに歩んだ六十年

—杉本俊朗・細谷新治両先生に聞く—



聞き手

秋山 敦恵 (立教大学)
菊川 秀男 (元東経大・海産研)
松本 脩作 (大東文化大学)
櫻田 忠衛 (京都大学)
高橋 宗生 (アジア経済研究所)

菊川 両先生にもご報告をしたことですが、残念なことに経済資料協議会はこの秋をもって解散することになりました。したがって、この『経済資料研究』も、こんどの号(38号)が最終号ということになります。会の機関誌であるこの雑誌は、我々の研究報告の場としていままで編集・発行されてきましたが、この号は、論文のほかに関係者の「思い出」の欄をもうけようという話になりました。

両先生にも、創設以来60年近く協議会とともに歩んでこられたわけですから、いろいろな思いを沢山お持ちだと思います。今日は思い出かい事柄、懐かしい人々のこと、あるいはご自分のこと、なんでも結構ですからご自由にお話しいただければと思います。

経済資料協議会の設立と創設期の人々

菊川 お二人とも会のスタート時点からかかわってこられましたね。

杉本 僕は6回あたりから出ているけど、その頃僕はもう横浜国大に赴任しているからね。

菊川 協議会成立後2年目か3年目ですよ。第6回の総会にオブザーバーで出席され、加盟前なのに次回の総会開催校を引き受

けられ、その総会(第7回)で加盟が認められたという話でしょ、
のん気なはなしですね。細谷先生は最初からですね。

細谷 そう、最初から。

杉本 呼びかけは神戸大だね。

菊川 神戸の原さんですか。

杉本 うん、神戸大の経済経営研究所事務長の原利雄さん。ねえ、細谷さん。あなた協議会に最初参加したころ、生島さんはもういたかな。ああ、『経済資料協議会五十年史』に「資料係生島」って書いてあるわ。

櫻田 そうすると、生島さんは最初から参加されていたんですか。

菊川 最初からね。これは関口さんが『五十年史』に書いた生島さんの思い出の記のなかの略歴なんですけどね。資料係主任ということで関係なさっている。

櫻田 それは何年ですか。

菊川 神戸大のスタッフになったのは1950年。協議会の創設が51年1月ですね。

杉本 小野一一郎君は、昔は大阪市大の研究所にいたの。

櫻田 そうです、大阪市大です。

杉本 市大にいたの。それから京都に行ったのか。そうですか。

櫻田 最初、住友銀行に入られたんですね。

杉本 そうですか。

菊川 細谷先生、協議会のスタートのとき、6機関なのですね。東京は一橋の経済研究所と東大の社会科学研究所の2機関。東大社研はどなたが関係なさったんですか。

杉本 『五十年史』を見ると、最初の集まりのときの社研の出席者は、事務長と図書係主任で、職員ですね。

菊川 どなたですか。

杉本 研究員みたいな人は出席していない、この第1回は。一橋はね、研究員の宇津木正君と細谷さんが出ているんだよ。事務の人は出ていないよ。社研はね、長谷川潔と言う事務のひと、図書係主任の中村宗四郎。あとでは社研にいたでしょう、丸山真男の弟子みたいな人が。その後アジ研に移った人。

- 松本 萩原宜之さん。彼が最初に出ているんですか。
- 杉本 いや、最初じゃない。あれは途中ですよ。
- 松本 萩原さんは最初は社研ですけどね。
- 杉本 社研です。はじめは事務だけで、後に社研からも研究員の人も出るようになったんだよ。そうそう。僕はね、1年ぐらい社研の非常勤講師というのになっていたんだよ。というのは、宇高基輔がね、研究員が一人ぐらいずつ非常勤を頼む権限があったらしいんだ。それで僕にね、資料室のアドバイザーになってくれって言って。それで非常勤講師扱いなんだよ。1週間に1回、社研に遊びに行っていたようなもんで、資料室で雑談ばかりしていた。何もしなくてもいいんだよ。
- 菊川 まあ、いろいろな文献やら資料や内外の学界の動向やらの情報源というわけでしょう。
- 杉本 なんかね、非常勤講師手当をくれたよ。
- 櫻田 授業をしに行ったわけではないんですね。
- 菊川 それは先生、「社会科学辞典」をつくるという話が東大でありましたよね。経済学部ですか。それとは別ですか。
- 杉本 あれとは別。あれはね、僕が横浜国大へ行く前のことだね。

杉本先生の戦後史

- 菊川 先生、その頃のお住まいは？
- 杉本 大田区馬込だよ。1950年に朝鮮戦争が始まったろう。またぞろ東京から疎開しなきゃいかんということになって、東京脱出を試みてここ片瀬に引っ越した。ここにうちの土地があったからさ。住宅金融公庫の融資の第1回目で建築資金を借りたんだよ。あそこ自分の土地があれば、金融公庫からすぐ借りられたんだ。そして、26年の春からここで半年ぐらいぶらぶらしていて、雑文書いて食っていたら、横浜国大が新制大学になって、ドッジ・ラインの経済9原則で、定員が空いていると、行政整理で定員削られちゃうっていうんだよ。そこで穴埋めに来てくれ、来てくれと言われた。英語と日本語の履歴書を出すんだよ。進駐軍がそれを審査するんですよ。そして僕は神奈川県

民になったから職住接近で地元サービスしようと思って国大に入ったわけですよ。

それが11月だからね、年度の途中で授業の担当がないわけなんだ。そうしたら学部長がね、「きみは本に詳しいから、資料室を整備してくれ」ってね、それで研究資料室作りを始めたんですよ。

菊川 学部長ってどなたですか。

杉本 徳増栄太郎。あの人とは原広書店で初対面だった。

菊川 その前後に東海大学があるでしょう。

杉本 東海大学というのは、当時、清水にあったんです。学長の松前重義が教職パージになり、後を継いだのが浜田成徳さん。二人とも内村鑑三の無教会派なんだよ。理工系だけでは駄目で人文社会系の学部も作らねばということで相談に行った先が同じ無教会派の矢内原忠雄先生なんだ。どうしようかと聞いたら、杉本君がいるんじゃないか、杉本君に相談しなさいと先生が言われたので浜田さんがやって来たんだよ。そんな経緯があってね、東大の「社会科学辞典」の編集主任をやりながら、東海大学のほうでも教職をやっていたんですよ。二股をやっていたんです。その頃は東京から通っていたんだ。肩書きは専任だったが、事実上は非常勤なんだけどね。

菊川 その清水では何を担当なさっていたんですか。

杉本 金融論と外書講読。だけどね、清水ではやっぱり学生が集まらないんだよ。そのうちパージが解除になった松前はいまのあそこへ、小田急沿線の伊勢原へ大学の本部を移したんです。松前というのはやっぱり起業家なんだよね。エンタープライジングで、あれだけの大学にしたんです。

思想弾圧時代の資料

杉本 話が前後するけれど、以前にも話したように、僕は1942年4月に「日本の変革の準備をしていた」という容疑で検挙され、その年の暮れに起訴猶予で釈放され、保護観察処分になったんだが、そのときの通知書が出てきたんだよ。

これがその「保護観察処分通知書」だ。「思想犯保護観察法第三条により決定した」とあるだろう。「保護司の観察に付す」とある。保護司っていうのは刑務所の教誨師みたいなもんだ。東京の保護観察所は新宿御苑の外側の千駄ヶ谷にあったな。それからね、こんな手紙が来るんだよ。日付は昭和二十年七月五日、敗戦四十日前だ。「拝啓 戦局益々重大なる折柄各位愈々御壮健にて邦家の為懸命御奉公中のことと拝察仕り候」なんてね、候文だ。封書は小山敏という差出人名義で保護観察所っていう名前になってないんです。個人名でね。そのへんはやっぱり考慮していたね。

- 菊川 当時、そんな配慮をしたんですかね。文末に、「先ずは御見舞旁々御依頼迄如斯御座候」とありますね。思想弾圧して、留置所に半年以上も放り込んでおいて、「お見舞い」もないですね。
- 杉本 それで、今考えているんだけど、こういうものを大原社研なんかで保管してくれないかってね。個人が持っている、こういうものはいずれゴミになっちゃうでしょう。
- 菊川 大原はそういったものも、集めてるんじゃないですか。こんど、是枝さんに聞いておきますよ。

完結しなかった『社会科学年表』

- 菊川 いま辞典のお話が出ましたが、細谷先生、高島善哉先生が監修なさった『社会科学年表』もそのころですか。先生も編集委員か何かをなさったのでしょうか？
- 細谷 あれはね、私も最後のころに手伝いましたよ。参考図書の文献目録（欧文）を作らされてね、編集室がね、池袋にあったの。あそこに何年もいましたよ。
- 菊川 あの本もすごく高く評価されたようですけれども、1巻で終わっちゃいましたね。その巻の対象とした時代が1401年から1750年でしたか。あれは全体では4巻とか5巻とかいう構想だったんでしょ。
- 細谷 確か全部で4巻だったかな、計画は。編集作業が予想以上に長くかかったものだから、編集費がなくなっちゃって、にっちも

さっちもいなくなっちゃってね、せめて1冊だけでも出さなきゃ面目が立たないというので、無理をいって1冊だけ出したという。覚えていますよ。あれは先生、出版社はどこでしたか。

杉本 同文館。

細谷 同文館ですか。

杉本 同文館はあれで経営がおかしくなっちゃったんだ。

細谷 同文館の社長には気の毒なことしましたよ。

杉本 社長は東京商大第1期生の服部幾三郎。同文館がみんな金を出したんでしょう。あれがね、売れ残っちゃって、ただみたいな値段で、君がみんなに分けたよね。あれはいま貴重だよ。もうないでしょう。

細谷 いま古本屋で結構高いですよ。

杉本 いまは高いだろうね。あのあと、第1巻のあとの時期を対象年次としたものを、名古屋の水田君が出しているでしょう。一寸、ダブっている時期もあったが。

細谷 そうですね、2冊でしたかな。編集委員代表の山田秀雄さんという人は、本の内容はきちっとしたものを作るんですが、この年表作成の予算管理とか、スケジュールをきっちり守るなどといったことにあまり関心がない、まあ世事に疎いというか、そういうマネージメントの下手な人。

菊川 山田先生以外に、あとどんな方が関係なさったんですか。

杉本 だいたいが高島善哉ゼミなんだよ。

細谷 有馬文雄さんという人を覚えていますね。本職はロシア社会思想史ですけどね。あと誰ですかね。

杉本 長洲一二君も少し関係していたな。

細谷 長洲さんもそうでしたっけね。

菊川 長洲さんのほかに水田洋先生。

細谷 水田さんももちろんね。

菊川 水田先生と長洲さんが、この『年表』の編集経過を、協議会の総会で2度にわたって報告されていますよ、52年53年ごろですけれど。

杉本 古賀さんも編集委員じゃないか。

- 細谷 古賀さんね。古賀英三郎さんも参加してました。
- 杉本 モンテスキューの研究者。
- 菊川 平田先生もメンバーなんですね。
- 杉本 平田清明、最後は鹿児島経済大学の学長だろう。
- 櫻田 はい。昔の鹿児島経済大学。いまは鹿児島国際大学ですか。
- 杉本 彼は横浜国大にもいたんだが、僕はその前から彼を知っていた。江戸の中期だが、幕府に命ぜられてやった木曾川の工事で巨額の借金を作った責めを負って自害した、平田鞠負という薩摩藩家老がいたが、彼はその直系の子孫だよ。
- 菊川 たしか神奈川県から「お国入り」して鹿児島経大の学長になられたのですが、一年足らずで病死されましたね。
- 杉本 あそこには沖縄の経済統計なんかをやった高橋さんという人がいたね。
- 菊川 ああ、高橋さん。高橋さんも亡くなりましたね。高橋良宣さん。前田昇三さんの弟分と言っちゃあれなんだけど、そんなような感じだったな。
- 櫻田 あの人は地域経済論をやっていた。
- 細谷 あの時、高橋さんがご馳走してくれた黒糖焼酎、美味しかったね。
- 菊川 じつに美味しかった。沖永良部のものだと言っていましたね。鹿児島でもなかなか手に入らないとか、総会でやった肝心なことは何も覚えていないんですよ。困ったもんです。

各地での協議会総会と終了後の「小旅行」

- 秋山 総会を鹿児島でもなさったことがあるんですか。
- 櫻田 鹿児島はね、いまの鹿児島国際大学というところが会員だったんです。だから全国総会もやりましたし、西部会の総会もやりましたね。
- 菊川 『五十年史』などをご覧になればおわかりのようにね、最盛期は70機関近くあったわけですからね。北は北海道から南は九州まで日の沈むところはない、それはちょっとオーバーですけどね。だからいろんな所で総会をやった。

杉本 僕が横浜国大を辞めて横浜商大に移ったときに鹿児島であったんだよ。

菊川 そうですか。70 年代の終わりごろですね。

杉本 あのととき川原さんが泣いたりしてさ、鹿児島で。

細谷 鹿児島でね。

杉本 鹿児島のお城のホテル。川原さんが泣いちゃったね。大騒ぎしたんだよ。何で泣いたんだっけな。

菊川 いまさら、もう確かめるわけにいきませんよ。

細谷 川原さんが泣くなんてよっぽどのことだよ。酔っぱらって、それで。

菊川 あの世の川原さんから抗議文が来ますよ。「いい加減なことを言わないでちょうだい」って。

櫻田 各地で総会をやったが、四国はずっとなかったんですね。

菊川 いや松山がありますよ。

櫻田 そうか、松山か。

杉本 松山でやったことがあるね。松山商大でやったんだろう？

櫻田 そうですね。

菊川 松山大学って名前変わったんでしょう？

杉本 松山大学。

菊川 松山商大、総会をやりましたね。松山沖で取れるサバと関サバでは、同じサバでも値段が5倍も6倍も違うと、懇親会の席上で、サバを肴に学部長が憤慨していたことを、いま思い出しましたよ。

杉本 道後に泊まったよな。あの総会で覚えているのはね「『資本論』の各版について」というタイトルで『資本論』の各版解説みたいなことをやらされたな、ちょうど『資本論』刊行 100 年のころじゃない。

菊川 松山総会は確か 70 年じゃないかと思います。

杉本 僕らはね、大阪からみんな船で行ったんだよ。瀬戸内海を、別府行きの船で。松山の外港の高浜か、あそこで降りたよ。朝着いたね、何て言ったっけ、大阪の船乗り場。天王寺じゃない。

細谷 天保山。

杉本 あそこから乗ったんだ。

菊川 その頃は、細谷先生は確か在外研究でイギリスですね…。

杉本 松山でやった時ね、僕は生島君と石鎚山に行った。高知へも行ったよ。あのとき一緒だったのは誰だ。

菊川 東大の斉藤滋さんですよ。終わったあとは何時も斉藤さんがリーダーですから。

杉本 大歩危小歩危を通して、それから海の神様、金比羅さん。金比羅さんにも行った。

櫻田 四国全部まわっていらっしゃる。

杉本 随分方々歩いたね。

細谷 もっとあとで、高知女子大のなんとかという学長さんがね。

菊川 何とかいったじゃないでしょ、木原先生ですよ。

細谷 そうそう協賛会の（元）会長の木原先生だ。四国の、おいしいお酒をごちそうしてくださったんだよ。本当においしかった。本人は見えなかったけど、お酒だけ来た。

菊川 ご本人は来なくてもいいみたいなことをおっしゃっちゃ駄目ですよ。

細谷 そうですね。本当においしかった。あの味は忘れられない。

杉本 そんな酒を飲んだことは覚えていないね。

菊川 同じ高知でも別の時のことでしょう。西の人たちが計画した個人旅行ですよ。

杉本 桂浜に行っってね、生島君が土佐犬のかいの一緒に写真に収まったり、鳴き砂っていうのかな。あれを買ったりしてね。その写真が残っていますよ。

菊川 いま松山の話が出て思い出したんですけれども、西では山口でもありましたね。私の記憶に違いがなければ、松本さんと初めてお会いしたのはその時ですね。

松本 何年ごろですか。

秋山 いま見ているんですけど、山口で総会があったのは、ちょっと70年代に見あたらないんですよ。ありました、1989年です。

松本 ちょうどあのときはホテルの季節でね。山口の街の真ん中で夜ホテルがよく見えたんですよ。非常に印象的でしたね。それを

覚えています。

杉本 山口でやって九州へ行ったでしょう。

菊川 九州に行きましたね。

杉本 長崎へも。大日方さんがいろいろセットしてくれたな。

菊川 そうです。その時の写真がありますよ。日大の大日方さんですね。東経大の風間君が一緒でしたね。山口へは確か東京から寝台特急で行ったんですよ。杉本先生、細谷先生、松本さんと私。記憶に間違いがないと思いますが。勉強したことはすぐ忘れちゃうのに、こういうことだけは良く覚えているんです。

杉本 僕は神戸大の岡田君のマイカーで淡路に行ったな。それから川原さんと天竜峡で舟に乗ったよ。細谷さん、あの時行かなかった？

細谷 行きましたよ。あの旅行を斡旋したのはどこのひと？

菊川 細谷先生の高知の旅とか、いまの淡路とか天竜峡などは、大経大の鍋島さんの肝いりでやったOB・OG会の話でしょ。

秋山 研究だけでなく、いろいろ親睦も深めた会だったんですね。

菊川 協議会は、私もちょっと今度の『資料研究』にも書いたんですけど、1960年代の半ばぐらいから10年間ぐらいですか、会員機関はどんどん増えるしね。季報の編集はいつでも頭をひねる問題で、しょっちゅう、ああだこうだ言っていました、それを除くと、60年代の半ばから70年代の半ばぐらいまでが一番の最盛期、勢いがありましたね。仕事もしたけれど、親睦も深めた時代でしたね。秋山さんも高橋さんも協議会の「黄金時代」のことはご存知ないと思いますが。勢いがよかったころのことを・・・。

櫻田 全然想像もつかないね。

菊川 じいさんたちが何を言っているんだと思われるんだけどね。仕事もやりましたけどね、結構ね、そういう楽しみというか。

杉本 ちょうど60年代？

菊川 60年代の半ば頃からですね。

蒲郡会議と弁天島会議

杉本 浜名湖会議があったころでしょう？

菊川 蒲郡じゃなくて浜名湖ですか。浜名湖はね、60年代の後半だと思います。弁天島ね。弁天島の何ていいましたかね、茗荷屋といったかな。



座談会で語る杉本先生

杉本 あの宿屋が例の、脇村先生の田辺中学時代の英語の先生の実家だね。その息

子の堀江兄弟、早稲田の堀江忠男の兄貴の新聞記者してた、堀江何んていったっけ。岩波の『日本資本主義講座』の編集委員をやった男。

菊川 堀江正規でしょ。

杉本 弟のほうは例のサッカーでね、ベルリン・オリンピックに出たな。彼は大月短大の学長なんかやっているんだよ、堀江忠男は。二人とも亡くなったね。茗荷屋というのは、あそこでは老舗なんだよ、弁天島の。誰かあそこでボートを漕いだな。

菊川 漕いだし、誰か泳いでもいましたね。

細谷 ボートはわたし。泳ぎもしましたよ。

杉本 あの前の、例の蒲郡会議というのが、『季報』の危機だったんだな。

菊川 そう、『季報』の危機対策だったんですね。「協議会—『季報』＝0」なんていわれていた頃ですから、まさに協議会の存亡の危機だったのではないですか。蒲郡が60年なんです。『季報』の発行回数を減らすとか、中国文献の採録中止、採録対象主題を縮小するとかの対策を立て、『季報』の売り込みに力を入れることなどをきめたんですね。

杉本 だから『季報』のセールス・プロモーションをやって、内容紹介のパンフレットをつくったり、売り込みやったんだよね。

櫻田 それは有斐閣がやめるときですか。有斐閣が出版元から降りる

とき。

杉本 あれはね、有斐閣が降りるのはもっとあとかな。

菊川 そうですね。蒲郡のあとの1962年のようですね。

細谷 有斐閣の京都支店長だった出浦さん、このひと、私たちのためにずいぶん頑張ってくれたんですが、結局だめだった。

杉本 細谷さんがこの『五十年史』に書いているけれど、国大の助手の坂上健一君と一緒にあなた、売り込みに歩いたって言ったじゃない？パンフレット持って。

櫻田 それは全国をまわったんですか。

杉本 そんなじゃないですよ。東京に調査部があるような大手企業の本社などなんだろう。

細谷 よく覚えていますよ。大学などでは、一つの機関に10冊とか20冊とか、買ってもらった覚えが。

要するに、国立の場合は校費じゃそんなもの買えないから、つまり別勘定のね、PTAとか後援会みたいところから金が出たんだよね。教官に1冊ずつやつたりしたところもあったな。

菊川 季刊ですからね。一度だけならお付き合いということはあると思うんだけど、合併号をいれて毎年3回出るわけでしょう。

いずれにせよ蒲郡は危機打開のための、弁天島は、会員機関の拡大に対応して、新規約の草案を作成し、機関誌の発刊をきめ、個人会員制度を作るなど、新しい飛躍に向けての体制作りをしたということで、この二つの会議は会の歴史の中でエポック・メイキングな会合だったといえるのではないですか。

『経済学文献季報』の創刊

秋山 『経済学文献季報』、あれはどなたが発案なさったんですか。『季報』を出版する、つくろうというのは？

細谷 その経緯は『五十年史』にも書いておいたけれど。

秋山 そうなんですか。

細谷 創刊した頃の話なんだけど、夏に京大で編集作業をしていたんですが、暑さに耐えかねて清滝に逃避したんですよ、そこは涼しくてまったくの別天地。沢山の資料を車に積んでの移動とか、

大変だったけれど、あのころは結構楽しかったですね。いい思い出ですよ。

秋山 当時は、その『季報』を出すというのは、とても先駆的ではありませんでしたか。

細谷 でしょうね、それはね。そんなもの出した大学はないでしょう。

秋山 ないですね。最新の文献を集めて、分野ごとに並べて編集・出版するというのは、経済学を研究する人にとっては大変便利なものだったと思うんですが。

細谷 そうでしょうね。そう思いますよ。研究者には随分喜ばれ感謝されたもんですよ。

高橋 私も 80 年代の初めごろ『季報』の採録を担当してしまして、分類がものすごく細分化されていて、大分類があって、小分類があって、非常に苦労したことを覚えています。

細谷 あれはね、分類表の作成は川原さんの力が大きいですね。

秋山 そうなんですか。

細谷 私がアイデアを出してもね、それを最後に詰めるのは川原さん。いつも彼女に怒られていましたよ。「先生はずばら」だって。確かにそうなんですよ。川原さんがいるから、私はずばらでもいられるわけ。アイデアは僕が出すんだけど、出しっぱなし。それを軌道に乗せるのが川原さん。まあ、楽しかったですね、あのころは。でも、川原さんはやっぱり怖かったな。

秋山 怖かったですか。

細谷 ああいうライブラリアンはもう出ませんね。古典に強くて書誌学に強くて、しかも機械化に強いって、そういう人はいないでしょう。

秋山 いないですね。

細谷 男の人でもあんな人はいないでしょう。すごい人ですね。惜しいね。がんで亡くなってね。

高橋 まだお若かったですよね。70 歳になるかならないかで。28 年生まれで 98 年だから、ちょうど 70 歳。

菊川 古いことで、ご存知ない方が多いのではと思うけれど、『季報』の歴史の中でごく短い間、ユネスコの I B E (“International

Bibliography of Economics”) の編集に協力していた時期がありますね。両先生、お二人ともその委員をおやりになっていたんではありませんか。

細谷 そうでしたね。日本ユネスコ国内委員会に頼まれて、杉本先生と私、「経済学文献委員会」の委員になった。年間に 300 タイトルぐらいの文献を選んで、委員長の高橋幸八郎先生に原稿を送りましたね。そんなこともあったな。

『季報』編集に纏わるさまざまな思い出

菊川 協議会で何をやったかという、まず『文献季報』の編集・発行ですね。これを四十数年にわたってやってきたわけですね。お聞きになっているとおり、全国の加盟機関が分担して採録して、そのカードを編集センターが集めて、年に 3 冊ですか、出してきた。

各機関の採録者に「実力の差」があるから、受け取った原稿を右から左とはいかない、そのチェック作業は結構大変でしたよ。編集センターは、長い間有力機関の回り持ちだったのですが、印刷所への入稿の締切日が近づいてくるとスケジュールに追われてセンターが音を上げる、そうすると助っ人を頼む。そんなことで、僕もちょっと、まあ、見かねて手助けに行くということが何回かあった。正直に言うと終わったあとの一杯、これが楽しみでね、こんなことを繰り返していると、お互い親しくなりますよ。

東部会には東大経済に斉藤さんという方がいらっしゃってね。東の大ボスですね。この方が人を集めてに脈やかなことをやるのが大好きでね。そういう意味じゃ、仕事もしたけれども、慰労会と称して飲み会やったり、花見をしたり小旅行をしたり、良く遊んだ。順番が逆かもしれないけど。そういう時代でした。僕なんか「古き良き時代」、なんて言っているんですけどね。

60 年代の前半だと思いますが、和書の採録は、その頃は一橋が担当だったんですね、町の本屋に繰り出して新刊書をチェッ

クして採録作業するんですが、そうするとね、時には万引きに間違えられることもあったようです。毎回というわけではないでしょうがね。いまは個人会員の宮地幹夫さんがこの『五十年史』にも苦労話を書いているけども、本当にこれは泣けてきますよ。邪魔者扱いにされて、邪険にされてね。僕が、「万引き屋」、「万引き屋」と言うと、彼怒るんだよね。当たり前だ。その総大将が細谷先生ですよ。もう涙の物語。そんなこともあったんですよ。

秋山 細谷先生は採録のとき、メンバーが万引きと間違えられたときに謝る係だったんですか。

菊川 もちろん断って作業をしているわけですが、「営業妨害してスミマセン」といったことでしょうかね。

細谷 謝る係といったほどには謝った記憶はないですけどね。

菊川 辛い思いをしたのは実働部隊ですよ。

細谷 ただね、ちょっと悪いと思うとね、店を出るときに必ず私、1冊本を買わなくちゃと思って。1冊買えば本屋さんは何とも言いません。宮地君とコンビで。でもね、よくあんなことやりましたね。信じられませんか、まじめだったんだなあ。あのころ僕は幾つ位の時だったろう？

菊川 先生のお歳？ 60年代の頭ですから、いまから約50年前。40代ですね。

細谷 そうすると40代のはじめだ。まあ、まだ元気でよくやったもんだな、あんなことを。

協議会の研究会

高橋 経済資料協議会では、研究会というものを創立・草創期からやっておられたんでしょうか。研究会は今年度もありましたけど。

細谷 研究会というのはあまりしなかったんじゃないですか。『五十年史』の年譜に何かにありませんか。

高橋 巻末にございますか。

秋山 昨日、杉本先生からは、最近の例ですと森ビルのなかの図書館（アカデミーヒルズ六本木ライブラリー）に行かれたとかとい

うのはお聞きしました。

高橋 そうですね。見学会と研究会というのが。先生、私がお聞きしたかったのは、ライブラリアンを育てるのに、サブジェクト・ライブラリアンを養成しようという動きが強まってきているんですけど、こういう経済資料協議会でやってきた研究会ですね。この『五十年史』を読んでみますと、書誌学的なものに偏っていたんじゃないかというような意見が出ていましたけど。

細谷 経済学そのものについてはあまりやらなかったですよ。それこそ書誌学ですね。そこに重点を置いてやったんじゃないでしょうかね。

高橋 これからの図書館員というのは、主題についても、サブジェクトについてもやはり教養を深めないとなかなかレファレンスに生かしていけないという面もあるのではないかとと思っているのですが、その点はどういうお考えでしょうか。

細谷 そうですね。特に経済学とか、学問の研究というのはしたことないですね。

高橋 経済学に関するコレクションとか、特質とかいう話が多いんでしょうかね。

細谷 ただ昔ね、この『五十年史』の年譜にもありますけどね。「図書館員のための経済学入門」という講座を開いたことがあるんですよ。1997年だから10年ほど前ですね。それで、私とか杉本先生とか、亡くなった杉山忠平さんが講師になってずっと入門講座をやりましたね。7回ほどでしょうか。これは東部会の研究会でやったんですよ、私も「経済思想史の歴史」なんていうのをやっていますよね。

高橋 西部会でもそういう、「図書館員のための経済学入門」みたいなかたちでやっていたんでしょうかね。

細谷 西部会としてね。

高橋 何かそれぞれ特質があるんでしょうか。

細谷 西部会も研究会をやっていますけどね。東部会みたいに大きな講座は確かやっていないですよ。この研究会のねらいは、現場の職員に経済学の知識を与えるという趣旨ですね。職員自身が

研究発表するということはなかったです。

「経済資料ハンドブック」のこと

秋山 経済資料協議会でこんなこともやってみたかったということ
は。

杉本 やりたかったっていうのは、やはり「ハンドブック」だよね。
幻のハンドブックのことが『五十年史』にも書かれてあるでしょ
う。僕もこれに書いたけど、あれだけ細谷さんが中心になって、
みんなが準備して材料集めたんだから、あれを基礎にしてね、
そして新しいものを補充してね、協議会が解散してもみんなで
協力してつくっていければね。ああいうハンドブックは、それ
こそレファレンス・ブックですね。

アメリカの図書館協会が出したウィンチェルのレファレンス・
ブック。日本図書館協会のは『日本の参考図書』だったかな。
有名なのはベスターマンですね。ビブリオグラフィー・オブ・
ビブリオグラフィーズね。ベスターマンなんていうのは、みん
なもう使わないのかもね。新版も出ないの？

細谷 使いませんよ。

杉本 一橋の社会科学古典資料センターがベスターマンについての研
究を出したじゃない？

細谷 何かな。彼についてではなく、ベスターマンが書いたものがあ
りましたよ。タイトルに「ブックマン」といった言葉があった
ような気がするけれど。

杉本 古典資料センターのモノグラフの1冊かな。

細谷 タイトルなど調べてみますよ（セオドア・ベスターマン『ブッ
クマン 50年ー1973年アランデル・エズデイル講義』一橋大
学社会科学古典資料センター Study Series No.50 3.2003）。
ところで、もうシュタムハンマー知っている人が、いなくな
りましたね。

杉本 そうだ、シュタムハンマーね。

細谷 この人はウィーン大学のカール・メンガーと弟のアントン・メ
ンガー兄弟の大コレクションの集書にも協力した優れた人なん

だけれど、ドイツのライブラリアンでこのシュタムハンマーを知っている人、いないんですね。私がドイツに行ったとき、向うのライブラリアンに、「その人どういう人ですか」って、逆に聞かれる始末。

杉本 20 世紀のはじめ、ウィーンのシュタムハンマーというライブラリアンがね、『ビブリオグラフィ・デス・ゾチアリスムス・ウント・コムニスムス』というのをつくったんだよ。3 冊本。

細谷 わたし、一橋の研究所に就職して、大塚金之助先生から最初にね。教科書として読めって渡されたのがその本ですよ。こんなでかい本。先生に教わってからずーっと座右においてありますよ。

杉本 ただ、当時ですから書誌事項なんかがね、いまほど整っていないですよ。しかし、19 世紀までの社会主義文献というのはあれに集約されているんですよ。アナーキズムも入っているんですね。

細谷 だけど、シュタムハンマーの研究をする人は誰もいませんね。私も本当はこの人のことを調べたかったんですが。

杉本 シュタムハンマーの伝記とかね、そういうのはわからないんだよ。

細谷 全然わからない。ドイツでもわからない。

杉本 ドイツでわからないはずないと思うんだけどね。

細谷 私ドイツで聞いたけど、誰も知りませんでしたよ。

杉本 だからそれはね、下っ端に聞いたからだと思うよ。

細谷 そうかもしれない。

杉本 だから、天野敬太郎さんみたいな人がいたらね。僕は天野さんに戦争中の昭和 18 年に会ったね。京大に行っているいろいろ話したけどね、当時だから法経図書館なんだよね、赤レンガの。天野さんは大正のはじめごろ京大に入ったのかな。あのころプリンテッド・カタログを出していますね、僕は古本で買って製本しなおして持っていますよ。あれはなかなか市場に出ませんね。明治 40 年代かな。要するに、河上肇先生が東京から京大に行ったところになるな。河田嗣郎さんね、あのころじゃないかな。

菊川 「経済資料ハンドブック」のことは、『五十年史』の年譜によると、その作成が60年度の総会の議題になっていますね。それから何回も同じ提案がされた経緯があって、実際の作業は80年ごろから始まりましたね。

細谷 経済学の参考図書、だからウィンチェルの経済学版を考えていたというわけ、いいところまでいったのだけれど・・・。

菊川 このプロジェクトは、協議会ピッタリのテーマだったと今でも思いますが、いい内容のものにする、それは当たり前ですし、各主題についてのベテランは揃っていたのに、あえて幾つかの対象、特に「地域経済」の担当者に「新人」を選んだ。それは大塚金之助流の「ブックマン」を育てながらハンドブックを完成させるという観点から、そのような人たちを選んだんですね。その狙いは間違っていなかったと思いますが、結果として両者がうまくかみ合わなかった。「二兎を追った」からですね。関係者の一人として慙愧に耐えない、といった気持ちです。

『経済学文献季報』とデータベース

杉本 この頃は文献索引誌を手にとって調べるとことはしなくなっているのだろうね。

細谷 インターネットで調べられるようになってから。

櫻田 論文索引はデータベースになっています。国会図書館が作っている雑誌記事索引があって、それがNII（国立情報学研究所）のCiNii（サイニイ）に組み込まれていて、パソコンさえあれば大学からはだれでも自由に利用できるようになっています。NIIのDBRには、『季報』がデジタル化された1982年から2005年までのデータ21万5000件が「経済学文献索引データベース」として入っています。

杉本 キーワードなんかをパソコンに入れたら、文献がアッという間に出てくるのか。とんでもない時代になってしまったな。

櫻田 ITによって効率性は格段に増大したのですが、情報の正確性、網羅性から見ると冊子体の索引誌よりはるかに劣ります。今の研究者、学生はデータベースにアクセスして論文を探そうと

する時、キーワードを利用します。いくつかのキーワードをパソコンに打ち込んで、それに関する文献を引っ張り出してくるのですが、このヒット件数が非常に多くなります。抽象的な言葉を使うと何千、何万と出てきてしまいます。それではとても使えませんので、次にちがう言葉を追加して絞り込むのですが、この言葉を少し具体的な言葉にしますと一挙にヒット件数がひと桁にまで落ちたり、ヒット件数なしになったりしてしまいます。これは明らかにデータベースの限界でして、キーワードとして入力した言葉はひとつの記号として使われることになり、それに合致するものだけが取り出されてくるのです。これは、索引語としてその言葉が出現しない限り取り出されません。索引語は、論文タイトルや雑誌名、抄録から取り出されるのですが、機械処理をしているためにその意味は無視されます。言葉の記号としての側面だけが検索手段として使われるのです。この方法が有効なのは、大量のデータがあることが前提となっていて、しかも記号のみで探し出してくるわけですから内容については無視されます。正確性に欠けるのです。

杉本 最近の研究者はそんなもので文献を探しているのか？
高橋 探そうとしている論文のタイトルや著者名がはっきりわかっていればデータベースからの検索は可能で、正確でもあるのですが、自分の研究関心や学習関心からどんな文献があるかを見ようと思うと大変ですよ。

松本 その点、『経済学文献季報』では分類ごとに文献が集約されていて、しかもその分類は経済学の分野を展開させたもので、自分の研究分野にかかわる分類のところを見れば、それに関する論文タイトルが一目でブラウジングできたのです。これは『季報』の大きな特色でした。

櫻田 そうしたことからも、研究者や学生、とくにこれから研究を始めようとする大学院生にとっては『季報』はバイブル的な存在で、1980年以前に研究を始めた人は、少なくない人たちが『季報』の世話になったことを感謝されています。いま、学会では中堅を担っておられる方にお会いしましても、当時の『季報』

が如何に役立ったかを懐かしそうに話してくれます。それを聞くたびに継続できなかったことを無念に思います。

菊川 採録作業で最も大変だったのは、分類をつけることと、のちに機械化されたときに分類とともにキーワードを付す作業でした。しかも、キーワードはタイトルに出てこない言葉を記入することでしたから大変でした。結局は論文を全て読まなければキーワードが付けられないのです。苦労しました。当時は『季報』採録者の僕たちの方がへたな研究者より論文をたくさん読んでいたかもしれませんね。

櫻田 『季報』の分類とキーワードの付与作業は機械がやるのではなく、採録者の一人一人が論文の内容を確認して、これまで培ってきた図書館職員の専門的能力を最大限駆使したものでした。ですから機械処理のように言葉を記号として取り扱うのではなく、まさに意味を重視して内容にまで立ち入って、分類が行われ索引語が作られたのです。その意味で正確な情報が得られるデータベースだったのではないかと自負していますが、しかし、これは大変な作業で、日常の業務をこなしてその片手間にやれるような仕事ではありませんでしたから。

杉本 昔は人名索引に被伝記者というのも入れて、スミスだったらスミスの著作の他にスミスについて書かれている論文も、スミスの索引から引けるようになっていたね。あんなことは論文を全て読まないといけない作業だったよね。タイトル中にスミスが出てこなくても、内容を読んで索引化していたのだからな。

菊川 そうですね。あのやり方は、当時の索引誌でも先端を走っていたと思いますよ。

櫻田 『季報』の採録作業は大変だったのですが、あの作業があったことで新任で入ってきた若い人も鍛えられました。大学の経済学という主題をもった図書館で専門家として育つにはなくてはならない格好の作業でした。試行錯誤しながらの採録作業が図書館職員養成の貴重な場でした。今はもうそんな余裕さえなくなって、経済学に強い専門的な図書館員というのはなくなってしまいました。機械さえ使えば良いという時代になってしま

いました。残念です。

菊川 櫻田さんが言われたような問題意識というのかな、そんなことを考えている若い研究者がいるのか、いないのか。どうなんでしょうね。

杉本 もういま、いないのだろうな。

櫻田 文献に対する関心の度合いは全然違いますね。いまは希薄になりました。

杉本 電話でいろいろなことを聞いてきてね、それを種に論文なんか書くのが出てきているよ。

菊川 そういう時代になってしまいましたね。

「経済学文献を語る」の「続編」－脇村義太郎先生回想録

菊川 この写真は、脇村先生の回想録のお手伝いをしたものだから、お礼ということで招待していただいて京都に行った時のんですけど。

細谷 懐かしい写真だな。

菊川 その話なんですけど、脇村先生の『回想録』というのは、二十数年前になりますが、杉本・細谷先生お二人のお話をうかがって、「経済学文献を語る」というタイトルで『経済資料研究』に二度ほど載せましたよね。経済学者に、特にその方の研究活動と書物とのかかわりあいというか、何というかな。そういうところにポイントをあてて始めたんですよ。そのうち当時私が勤務していた研究所の会長だった脇村義太郎先生にお願いしてみたらどうだろうと。いろいろとお話を引き出して結局3冊本になったのだけれども、もとは『資料研究』に掲載することを考えての企画だったんです。元々の話は。

杉本 こういうことなんだ。僕が高等学校のころは、昭和6年から3年間だけど、あのころね、有沢、脇村、美濃部等々の人たちが、世界経済批判会という名前だね、いろいろみんなが手分けして。

菊川 阿部事務所の時代ですね。

杉本 ええ。みんなが阿部事務所に集まっていたころにね。阿部事務所っていうのは、神田淡路町あたりの医師会館のなかにあった。

そこに外国の資料を集めてね、そこで研究会をやって共同執筆する仕事場、ワーク・ショップだったんですね。それが非常に評判だったんですけど。僕はあの先生たちの、ああいう情勢分析ですかね。独占とか何とかの。世界恐慌が始まっていたので、先生たちはあの資料をどう扱って分析して共同執筆したのか。そういった話を先生に聞かせて欲しいと言ったら、先生が乗り気になってね。じゃあやりますよって。はじめは2、3回話を聞いて、それを整理して『資料研究』に載せようというつもりだった。やり出したら、数回やっているうちに先生は学士院長になっちゃって、忙しくなっちゃってね。あのころ学士院賞をもらった人の論文が剽窃だと訴えた北大の東洋史の教授がいたんだよ。その問題があって、学士院は大変だったんだ。それを解決するまで先生は、こんなこと今できないよって、少し中休みになったんです。

菊川 ちよっとね、動きがとれませんでしたね、一時期ね。

杉本 あの妙な教授は結局、北大をやめたよね。

菊川 そうですか。結末は知りませんでした。

杉本 ああいう変な人ときどき出るんだよね。

菊川 脇村先生のヒヤリングの記録は、結局『経済資料研究』には載らずに、岩波から単行書（『回想九十年』『二十一世紀を望んで』『年譜・著作目録』）で出たんですけども、私なんかはそのあと、例えば身近と言ってはなんですが、杉山忠平先生とか、木原正雄先生あるいは杉原四郎先生とか、何人もいらっしゃいますよね。そういう方々からもお話を伺って「経済学文献を語る」というかたちで連載できればいいなと思っていたんですけどね、実現できずに惜しかったですね。

細谷 水田洋さんから聞きたかったな。面白い話を聞くことができたと思うんだけど。いま杉山さんの名前が出たけれど、懐かしいな。あの人、昔から知っていましたよ。大塚ゼミの出身だからね。静岡大学の専任だったとき、頼み込んで社会科学古典資料センターの教授として一橋に来てもらった、私の後任ですよ。穏やかな人でしたね。

- 菊川 協議会の会長になっていただきたいと、細谷先生とご一緒にお願いに行ったのを覚えておいでですか。
- 細谷 覚えていますよ。国分寺の東経大のキャンパスだったね。東経大を定年退職して、そこの特任教授としてローダデール文庫の目録の作成にかかっていた。
- 菊川 あの時、木原先生に会長職を5期もお願いしていて、もう勘弁してくれといわれ、困っていたんですよ。杉山先生には「1期だけ」といってお願いしたんですが、結局2期4年間になってしまいましたね。
- 杉本 脇村先生の本で最後に出たのは。
- 菊川 『わが故郷田辺と学問』（岩波書店 1998）ですね。
- 杉本 できたのはちょうど一周忌のころだな。あれが脇村プロジェクトの終わりか。
- 菊川 と思ったんですが、その後ローラ・ハインに掴まりましたね。
- 杉本 ああ、アメリカの女の学者か。ノースウエスタン大学歴史学部教授だそうだね。
- 菊川 日本現代史が専門だそうです。来日したとき面談したいと言われ、大内兵衛先生と有沢・脇村先生たち大内門下の、戦前戦後の軌跡を分析した本の日本語版の出版を控え、いろんなことを聞かれました。「大内ゼミのことは俺に任せておけ」と言われていた杉本先生が、直前に具合が悪いとかで来られなかったものですから往生しましたよ。細谷先生とご一緒でしたが、脇村先生のことは何とか返事ができましたが、外の人たちのこともいろいろ聞かれたものですから。
- 杉本 あれ、翻訳でたんだらう？
- 菊川 出ました。『理性ある人びと一力ある言葉』（岩波書店 2007）というタイトルです。筆者のローラ・ハインは、『敗北を抱きしめて』（岩波書店 2001）で日本でも有名な、ジョン・ダワーの弟子だそうですね。
- この次は、鎌倉の文化人の交流のことを書くとか言っていましたよ。

出版社のPR誌など

杉本 いま東京の日本経済評論社と京都のミネルヴァがいいね。日経評は昔の日本評論社の役割をやっているわけね。有斐閣は、一時期経済をだいぶやったけど、このごろあまり経済を一時ほどはやらなくなっちゃったでしょ。

京都に行っても古本屋をまわるのが楽しみだったけどね。戦前だが、当時の本好きが集まって出した全国の古本屋の分布図があつてね、それを見ながら古本屋めぐりをよくしたもんだよ。ザラ紙の謄写刷りのもので、古本屋ガイドブックの先駆けみたいなものかな（雑誌愛好会『全国主要都市古本店分布図集成』同会 49 p. 1939）。

櫻田 寺町ですね。

杉本 寺町に昔は多かったですよ。鳩居堂の隣の和本屋ね。何と言ったかな。竹筧楼だったかな。あれはまだあるの。

櫻田 いままだありますね。

杉本 三条の古い狭い通りというのはね。昔の日銀と郵便局があった赤レンガね。あそこなんか、なかなか風情があつてね。あれは京都文化博物館になっちゃつてね。

ところで、いま東大出版会は古典の翻訳物をやらなくなって名古屋でやっているでしょう。水田君の関係か。ステュアートもカンティロンも。京大の学術出版会というのはどういう計画を持っているの？ギリシャか何かの古典の大きなものをやっているでしょう。

櫻田 そうですね。京大の外郭団体になっていますから。

杉本 あれは文学部関係が割合大きいの？社会科学もやっているの？

櫻田 社会科学もしていますよ。

杉本 ああ、そう。僕はそこの目録なんか見たことがないのでね。大学出版部協会という団体があるんですよ。東大とか法政とか、ああいう目録を全部カセットに入れたのがあるんだよ。各大学出版部の目録がセットになっている。言えはくれるんだけどね。ああいうのは毎年黙っていても送ってくれるのかね。僕は不思議と思うけどね、岩波にしろ有斐閣にしろ、「図書」とか「書

斎の窓」なんか送ってくるだろう。だけど、『図書目録』というのは黙っていては送ってくれないんだな。送料がかさむからね。年1回でしょう。岩波なんか半年に1回ね。

櫻田 毎年、版は新しくしていますよね。

杉本 だから、あれ黙っていても送ってくればいいのに。いちいちね、手紙を書いて目録を送ってくれというのは面倒くさくてね。日本経済評論社なんかもそう。あそこは「評論」って小さいものを出しているでしょう。あれは送ってくるけどね。われわれにはバックリストが大事なんだ。フトコロの相談相手としてね。

菊川 このあいだ、新しい号が2、3日前に来ましたね。

杉本 あそこは古在さんと出入りがあるの。

菊川 古在さんというよりは・・・。

杉本 大日方さんか？

菊川 そうですね、大日方さんの「エリア」のようですね。あそこの栗原社長は経済資料協議会の隠れたファン。

杉本 ファンなんだな。

菊川 『経済資料研究』をちゃんと製本して、自分の机の後ろに並べてあるんだそうですよ。日経評が出した『東京経済雑誌記事総索引』（全4冊 1996）には、金澤さん、大日方さん、古在さん、早大の渡辺さん、また個人会員だった田口さんたち、協議会の有力メンバーが十数人編集作業に参加してますね。それに杉原先生や杉山先生もここから何冊も出されていますから、この出版社、協議会とは縁が深いんですよ。

杉本 そうらしいな。あそこは、本を出したけりゃ相談に乗ってくれるんじゃないかな。あの「評論」の後ろに編集者が毎号書いているだろう。あれ読むと、最近の学術出版の様子がわかるよ。

菊川 あれは面白いですね、「神保町の窓から」といって連載してますね。書いているのは社長だと思いますよ。

杉本 あれ面白いんだよ。

菊川 随分前の話ですが、当時の東大経済学部長の安藤良雄先生が私のいた研究所の脇村先生を訪ねてこられたとき、書庫で海運の本を見ながら、「杉本さんは、乗り物にはなんでも興味を示す

からなあ」と言われていましたよ。先生は「乗り物マニア」として学界でも有名なですね。日経評は鉄道関係の研究書もたくさん出していますね。

杉本 そうだろう、あそこは鉄道史学会の事務局の世話をしているだろう。

菊川 私の研究所も、海運の本を7～8冊出してもらいましたよ。

川原和子さんとカーペンターのこと

秋山 先生、よろしければ、川原和子さんの回想録（川原さんを追悼する会『女性司書の足あと―回想の川原和子』同会 2008）をお見せいただいてもよろしゅうございますか。

細谷 どうぞ、これに私、書いていないんですよ。杉本先生に少々怒られてね。

秋山 へえ。川原さんについて、一つ何か強烈に残っていることは。

細谷 すべて強烈だよ。もう女性でね、ライブラリアンでね、この人を越す人はもうたぶん出ないと思います。あの人は津田塾出身ですからね、英語がペラペラで。それで、名古屋大へ就職して、そこで大活躍した。

杉本 川原さんはね、この本にも誰かが書いているけれど、学生運動の活動家だったもんだから、津田の学校当局ににらまれてね。それで東京では就職できなかった。そのときすでに名古屋大経済学部 にいた水田君が世話したんだ。この本の年譜を見ると、あの人は吉林省で生まれたんだよね。

間島か。

秋山 中国ですね。

杉本 間島というのは金日成の抗日活動の根拠地ですよ。あそこまでは日本の関東軍の力が及ばなかったんだよ。あんなところで川原さんは生まれているんだな。ずいぶん彼女も苦労したね。

細谷 彼女はハーバードに、確か1年ぐらい研修に行ったでしょう。あそこに経済



座談会で話を聞く細谷先生

学の古典の文庫があるんですよ。

秋山 ハーバードに？

細谷 クレス（Kress）文庫でね。そこで十分に勉強してね。彼女は英語も達者だけど、経済学にも強いんですよ。津田塾時分から社会科学研究会に入っていてね、卒業後、一橋の聴講生として高島善哉先生のゼミで勉強してました。だから、経済学にも強かったですね、その頃、僕のいた研究所の資料室によく出入りしてたな。ハーバードで十分に実力をね、養って。

秋山 ハーバードのなに文庫とおっしゃいましたか。

細谷 クレス文庫。あとね、イギリスにゴールドスミス文庫というのがあります。この二つが世界の経済学の二大文庫ですよ。それに匹敵するのは一橋大学の図書館ですね。クレスにカーペンターという人がいてね。すごく出来る人。ニューヨークの古書店、パート・フランクリン所蔵のフランスの古典のコレクションが売りに出た時、私は当時の一橋の都留学長に命ぜられ、そのコレクションの内容調査のためニューヨークに行き一月ほどいました。いろいろといきさつがあったんですが、結局それを買って、その整理をカーペンターに頼んだんですよ。そのとき、ニューヨークでこのコレクションのセリで「競い合った」相手が、なんとカーペンターのいるクレスだったんですよ。皮肉なもんですね。10 カ月間かな、契約してね。奥さんと子ども二人連れてね、来てくれました。整理をね、全部じゃなくて、古典の整理を全部やって帰りました。

秋山 これを 10 カ月で成し遂げたんですね、カーペンターさんは。

細谷 ええとね…ここに書いてありますね。ハーバード大学クレス文庫のケネス・カーペンター氏は、本文庫整理のため、本学に招聘、10 カ月の予定。

秋山 ああ、本当だ。

細谷 買った中には、マニュスクリプトが千何百もあったんですね。これは日本人では絶対に整理できないので、特にこれに重点を置いてそこを完全に仕上げてもらったんですね。三鷹の国際基督教大のキャンパスの中にある、その基督教大の先生がね、ちょ

うど1年間ね、アメリカへ行った。ああいうの何と言うんですか？

秋山 研究休暇ですかね。サバティカル・イヤーでしょう。

細谷 そうそう。その留守宅を借りてね。そうしたらね、真っ正面に富士山がばしっと見えるいい場所なんです、彼氏も大喜びでね。

秋山 先生の持っているそれは、どうも契約書のようですね。

細谷 これ？これはそのときの契約書。

秋山 当時からきちんとしていましたね。契約もきちんとして。

細谷 やっぱそういう点は、向こうははっきりしてますよ。買ったときの学長は都留重人先生。やっぱりあの人の力は大きいですね。三井グループからお金を出してもらい、文部省からも随分予算をもらいました。それで一橋が手に入れたんですよ。ある時、そのカーペンターが名古屋で講演を頼まれましてね。そのときね、一橋の図書館長だった、私の友人で東洋史の専門家ね。

杉本 名前、何と言ったっけ。きみと同期の人だろう。

菊川 増淵龍夫先生でしょう。

細谷 そうそう。彼が図書館長だったからね。彼は堅い人物でね。カーペンターが名古屋に講演に行くという話が出たとき、そんなこと契約にないぞって、それに反対したの。私はたまたま彼と商大の同級生だったのでね、あんたそんなバカなこと言っているとあとで笑われるよって、やっと口説いてカーペンターが名古屋に行くのを許可してもらった。それで川原さんは彼と縁ができたんです。

杉本 それでカーペンターが帰国してから、川原さんがハーバードに行ったんだよ。

細谷 だから、私もちょっと役に立てたかな。

杉本 カーペンターは5、6年前、『国富論』のフランス語版の各版を比較検討した研究書を出したでしょう。あれは傑作だね。

細谷 あの人はずいね。

杉本 すごいよ、あれ。

細谷 アメリカでもライブラリアンで経済学を知っているのは彼だけ。

杉本 彼はもうクレスを辞めてハーバードの出版部に移ったな。どうしてあんなところに行ったのかね。

細谷 もったいない。あんなに貴重な人はいないですよ。

杉本 カーペンターはまたもう一度日本に来たようだな。

細谷 いっぺん来たんです。来たけどね、私は会えなかったけど。

杉本 会えなかった？

細谷 講演に呼ばれたんだけど。あれは惜しいことしたな。カーペンターも出版部長を辞めて定年で悠々自適じゃないですか。

菊川 あの人はいくつぐらいですか。

細谷 70 歳ぐらいかな。私よりずっと若いですけどね。

菊川 私は彼と東大寺のお水取りに一緒に行っているんですけど、僕より年上だと思いましたが。

杉本 クレスのパブリケーションがあったでしょう。彼は経済学のダイアログ、『18 世紀におけるドイツ語からの、ドイツ語への翻訳』というのを 1977 年に出しただろう？クレス所蔵資料の解題だな。あれ以後なにか出ているの？クレスの。それがわからないんだよ。

細谷 私もわかりません。図書館に聞いてみますよ。

杉本 それからね、あんた東北大学で「西洋書誌学入門」を講義したろう。あんたの『私の体験的書誌学』には、あれの半分ぐらいしか入ってないんでしょう？

細谷 いや。

杉本 あれは全部入っているの。

細谷 入っていますよ。

秋山 このようなノウハウも含めて、経済資料協議会のいろいろな活動の基礎になってるんですね。

杉本先生と古書店主

秋山 杉本先生のお宅も先生のお宅らしく、本がたくさんございました。

細谷 ええ、杉本先生はそうでしょう。

秋山 ええ。

- 細谷 大変なものですよ。たとえばね『資本論』の初版本とか貴重な本がいっぱいありますよ。
- 秋山 そうなんですか。そうそう、私が見せていただいたのは、1700 何年でしたか、チャイルドの 1700 年代のご本を何冊かお持ちでした。
- 細谷 ああ。そういう本がたくさんあります。杉本先生はね、大塚先生について、2 番目に社会科学の本に強い人ですね。
- 菊川 さっき話が出たシュタムハンマーの三冊本もお持ちでしたね。
- 杉本 そう、持ってるよ。今でも時々使ってる。
- 細谷 先生は、何時頃から古本屋めぐりを始めたのですか。
- 杉本 そうだね、前にも少し話したことがあったと思うけれど、大正 15 年春、武蔵高校の尋常科に入学してから、参考書などを探しに神保町に出かけるようになってね。新刊書は学校の帰りに新宿の紀伊国屋で買ったが、古本はやはり神保町だったな。
- 菊川 もうその頃紀伊国屋は開店していたのですか。
- 杉本 その頃だったね。当時は関東大震災のあとで神保町はいまほど店の数は多くはなかったな。通っているうちに店の専門なんかがだんだんわかってきた。
- 細谷 古本屋のオヤジと、どんな接触があったのですか。
- 杉本 そのころはまだ書生だから、神保町というより自宅近くの店に出入りしていたよ。大森新井宿の池上通りに東湖堂という古本屋が、僕が高等科の一年生（昭和 6 年）のころに開業してね、そこによく行ったよ。店主は古藤駿介、龍介の兄弟。龍介は戦後に出た『解放のいしづえ』（解放運動犠牲者合葬追悼会 1956）に略歴が載っているが、福岡県出身で 1904 年生まれ、地元で労働運動に参加していたんだが、日本共産党の党員候補として 3・15 事件に連座しちゃって捕まっちゃう。後に上京して兄貴と一緒に東湖堂という店を開いたんだ。
- 細谷 その東湖堂って、僕も知っていますよ、戦前、大井町に住んでいたから。知っているし、何回か行ってはいるんだけど、あまり買った覚えはありません。
- 菊川 トウコドウって、藤田東湖のトウコですか。

杉本 その東湖なんだが古藤という苗字をもじったんだよ、読みを逆にしたんだな。こういう人だから、扱う古書もどんなものか、見当がつくだろう。いまでも手元にあるヒルファディングの“Das Finanzkapital” (Wien,1927) のタイトル・ページに am 1 Feb.1934 って記入してあるが、本郷の福本書院が輸入したもののなんだが、それを東湖堂で買ったというわけなんだよ。オヤジの駿介さんは、東京（あの頃は、大森あたりではこう言っていた）よりはずっとお買い得ですよ、なんて言っていたのを覚えているよ。その後のことだが、僕が東大に入って学生消費組合赤門支部で学生委員として活動したんだが、僕は知らなかったんだが龍介が組合の古書部を受け持つことになって、市で仕入れていた。店は兄貴の駿介が守っていた。

菊川 先生とその兄弟、縁が深いんですね。

杉本 縁はまだ続くんだ。大学卒業後、僕は東洋経済の記者になって、紙・パルプを担当していた、そのころ紙の需給が逼迫してきてね、値上がりしはじめていたんだが、その頃駿介は店を番頭に任せて故紙業者になっていて、ぼくのところに紙業界の動向を聞きに来ていた。情報取りっていうやつさ。

菊川 それじゃ、集書では世話になったが、情報提供でそのお返しをしたということになりますね。

杉本 そうゆうことになるかな。龍介は、学生消費組合が昭和 15 年に当局により解散させられたので店に戻ったんだが、結核で昭和 19 年に亡くなった。

細谷 店はどうしたんですか。

杉本 番頭が引継いたんだが、敗戦後はやい時期に閉めちゃったな。駿介は『古書通信』（14 号 昭和 9 年 5 月）の「古本屋の開業を語る座談会」に弘文荘の反町茂雄や巖南堂の西塚定一たちと出席していたよ。

細谷 この人の話、はじめて伺いましたよ。さっきヒルファディングが出てきましたが、あとどんな本を買われたのですか。

杉本 そうだね、カントの『純粹理性批判』のクレナ文庫版や、“Quarterly Journal of Economics” の 1910 年～ 20 年代のバツ

ク・ナンバーを10銭パーで買ったりしたね。

細谷 洋書の原広さんとのお付き合いはこのあとですか。

杉本 それはこれから話します。その原広さんだが、彼のことを初めて教えてくれたのが龍介なんだよ。この辺のことは、いま、東京洋書会が後楽会いらい丁度100年ということで、この10月に『東京洋書会誌』の100年記念号を出すので、崇文荘の佐藤毅君に頼まれて、洋書業界の大先達、原広さんへのエロージュを書いたから、関心があったら読んでください。

知らない人もいると思うので、原広さんの人となりを紹介しておこうか。彼は1899年八王子生まれ、明治32年だな。お父さんという人が三多摩から相模にかけての繭の仲買人、明治45年小学校を卒業してすぐ、九段下の俎橋より神保町寄りにあった堅木屋（当時唯一の洋書専門古書店）に勤めたんだな。

細谷 堅木屋、懐かしい名前だなー。丁稚奉公ですね。

杉本 大正時代を通じてそこで修行して昭和に入って独立。神田猿樂町の自宅で、主に学者を相手に通信販売を始めたんだ。

菊川 小学校を卒業して、いきなり洋書屋ですか、しかも古書店なんでしょ。

杉本 抜群の記憶力の持ち主で、すごい人だよ。通信販売から始めたんだが、昭和11年になって、東大赤門前に店を開いた。

菊川 赤門前ってどの辺ですか。

杉本 赤門の斜め前に白文社という印刷所があって、そのそば、大野屋旅館の隣。それで思い出したけれど、その頃僕は学消の機関誌の『図書評論』の編集長をやっていて、その印刷所にしょっちゅう行っていた。龍介に聞いていたもんだから、早速原広に行った。昭和11年の春だ。このときが初対面。ぼくは『図書評論』のほかにも、学生の同人雑誌『東大春秋』にも関係していて、その雑誌に原広の開店広告を出してもらった。広告料は確か1円ぐらいだったな。原広には随分本代を払ったが、このときはもらった方だ、もちろん僕のポケットにはいったわけじゃないがね。堅木屋時代から、その頃一ツ橋にあった東京商大の三浦新七、高垣寅次郎、金子鷹之助などの先生たちの知遇

を得て、社会科学文献について、いろいろ知識を得たんだろうな。

細谷 一橋の先生たちとの交流は随分古いんですね。

杉本 そうだね。東大の先生たちとは、本郷に開業してからかな。岸本誠二郎先生などは猿樂町へ朝早くから押しかけたらしいよ。岸本さんは、東大の土方ゼミ出身で当時は法政のスタッフだったので例外かな。

菊川 原広からどんな本を買われたのですか。

杉本 どんなって、たくさんあるよ。最初買ったのはブランキの“Histoire de l'économie politique, 5éd.,1882 だったな。それがきっかけで常連になった、よく通ったよ。東洋経済に勤めるようになってからもね。土曜日の午後になると、三越前から市電に乗って本郷に行くんだよ。東洋経済を辞めて世界経済調査会に移ってからも、その資料室の整備を頼まれたりしたこともあって、調査会の蒐書でも世話になったが、書物の版次の区別や稀少性や、流通情報などいろいろと教わった。

細谷さん、あんた原広との関係は？

細谷 名前は勿論知っていますし、店に行ったこともあったと思いますが、買ったという記憶はないんですよ。一橋の研究所も買っていませんね。

杉本 そうなの。大塚先生はどうだろう。

細谷 先生から原広の話を聞いたこともないですね。

杉本 あまり付き合いは無かったのかな。戦後になって、原広さんは新刊書の輸入に重点を置くようになったので、ある時期からは、一誠堂から独立して崇文荘を興した佐藤毅さんから買った国内外の古書が、私の蔵書に占める割合が多くなったね。佐藤さんは私より二つ年下だけど、業界の最長老の一人で、付き合いからもう 60 年にもなるよ。高円寺の都丸書店の外丸茂雄さんは亡くなったが、マルクス主義系統のものは彼の世話になったと思います。

杉本先生の、これからの研究プラン

松本 杉本先生に伺いたいんですが、退職後にやろうと思っておられたことは何ですか。

杉本 僕はね、今度の『経済資料研究』に翻訳を載せたストライザントともう一つね、ジョサイア・チャイルドの書誌的検討。杉山忠平さんがこのチャイルドを翻訳（『新交易論』東大出版会 1967）しているんですよ。アダム・スミスの『国富論』（岩波書店 2000～1）のほかにもね。彼はこれに解説を書いているんだけど、どうも結論がはっきりしない。チャイルドについては大正6年に福田徳三と武藤長蔵との間で論争があってね。海外ではいまでも問題になっている。というのは、この『新交易論』という本は、当時のベストセラーで、クレス・ライブラリーのカーペンターが、経済学のベストセラーというのを選んだことがあるんです。そのときもリストに入っているんだけどね。いまだに外国でも国内でも各版の関係が混乱しているんでね。それを書いておいてやろうと思っているの。それに、僕も昔ね、『資本論辞典』を、あれは1960年ごろかな、編集したときに。

菊川 青木書店のですか。

杉本 そう青木。あれをやったときに人名項目というのがあってね。『資本論』に出てくるいろいろな人を資本論ではどう扱っているかという点から、人名を取り上げたんですよ。そのとき、スミスを研究しているのは誰かとか、ケネーは誰かとか、全部それぞれの第一人者みたいな人に頼んだんだけど、当時まだちゃんとやっている適当な人物がいらないような人名が残っちゃったんだ。あの『辞典』はとても厄介だったんだ。例えばね、カッコや句読点などの約物が非常に多いのでね。一行内にスペースが空いては体裁が悪いんでね、1行ごとにぴったり活字がそろるようにリライトを盛んにやったんだけどね。このチャイルドは当時、日本でとくに研究していた人がいないんで、しょうがないから僕が編集委員の責任で書いたんだ。そのとき以来、チャイルドを追及しようと思ってね。そのほかにも、まあいろいろあるんだよ。いまのチャイルドも一環なんだが、ご存じのよう

に、いままでアダム・スミスが経済学の元祖だと言われてきたが、その先達にジェイムズ・ステュアートがいるだろう、アダム・スミスはわざと自分の先輩を無視した。だから、「アダム・スミス以前」とか「スミスの先行者」とかいう本は、要するにアダム・スミスより前の先行著作に注目している。ぼくも、小林昇君や竹本洋君たちに追従して、杉山忠平さんのチャイルド研究を検討しようと思っているんだよ。

菊川 先生、チャイルドの原本は何冊もお持ちなんですよ。その他の材料もお手元にあるようですから、あとはおやりになるだけですわね。

杉本 そうだな。チャイルドはフランス語版も含めて、7冊ほどあるよ。ところで細谷さん、あなた津田内匠さんの近況知らない？

細谷 知っていますよ。私は津田さんとは割合に親しいんですよ。

杉本 津田さんは、一橋の古典資料センターには籍は置いていないけど、あそこの運営のアドバイサーみたいなことはやっていたんだろう？

細谷 それはそうだけど。

杉本 僕はね、彼に早くやってもらいたいことがあるんだけどね、僕の生きているあいだに。

細谷 それは何ですか。

杉本 チャイルドのフランス語訳をテキストに邦訳を彼がやっている筈なんだよ。訳者グルネのルマルクがあつてね。これを彼に訳してもらいたいんだよな。

それにしても脇村先生関係で時間をとられすぎた。結構、愉しかったこともあったけどね。いったい何年かかったんだ。

菊川 『回想録』のヒヤリングが始まったのが89年、最後の『わが故郷……』が終わったのが98年、その間ご一緒に編集した本が6冊です、ちょっと中断の時もありましたが。

杉本 僕は国大も商大も定年になって、自分の最後までにやろうと思っていたのが、全然できないんだよ。いろいろ材料を集めておいたんだが。やろうと思ったら目が悪くなっちゃってさ、身体もね。横文字の方はね、スペリングなんかちゃんと覚えてい

るのに、漢字が駄目。こっちの方は、何偏だったかな、つくりはどうか。尽力って言葉があるだろう、尽力の「尽」という字、あれの部首はなんだったか、あれ、「しかばね」っていうらしいけれど、それをいちいち岩波の国語辞典などを引かなくちゃね。ルーペ片手に、大変なんだ。

杉本先生の近況

菊川 こういう写真があるんです。これは先生の米寿のお祝いのときの写真なんです。米寿だから88歳ですね。ですから今から7～8年前なんですけど。山形の温泉宿に泊まって。

杉本 これは赤湯？

菊川 赤湯ですね。

細谷 先生、金屏風をバックにお殿さまみたいです。

杉本 赤湯では結城豊太郎の記念資料館に行ったな。あの日銀総裁のね、安田保善社の専務理事などもやった。あの人は学者ですからね、ここのコレクション、いいものがあるんですよ。彼はあそこの出身なんですね。それからハーグの国際司法裁判所の所長をやった安達峰一郎という裁判官がいるんだ。今の人たちはあまり知らないだろうが、この人もあの辺の出身。赤湯っていうのはね、中国風で言うところと丹泉なんだね。だから泊まった宿もたしか丹泉ホテルっていついたな。あの辺をフルーツラインって言っているんだよ。もうサクランボもラ・フランスも、あそこは一年中、果物があるんですよ。いいところですよ。今度、最上川の船下りをやりたいなと思ってるんだが。

赤湯に泊まる前に川西町へ行ったな、あそこには井上ひさしの遅筆堂文庫がある。彼はふるさとのあそこに蔵書を全部寄贈しちゃったんだよ。それが町立の遅筆堂文庫。自分が使うときはそれを東京に取り寄せるんだそう。自分のライブラリが町立になったんですよ。そこにはね、会社史なんかも随分並んでいましたよ。企業史。

櫻田 井上ひさしは『社史に見る太平洋戦争』（新潮社 1995）を書いてますね。

杉本 秋山さんは約束の時間になるとちゃんと9時半に現れるからね、こっちは飯食っている暇がないんだよ。僕は朝起きると庭の草抜いたり、昼ごろまで夢中になってそんなことをやっているんだよ。そうするともうお昼になっちゃう。飯食うの忘れて。このごろね、年取ると腹が減らないんだ。ミルク1杯ぐらい飲んでね。特にいま、朝の涼しいうちに庭仕事しているからね。

櫻田 暑い時期はあまり外に出られないほうがいいですよ、先生。

杉本 うん、熱中症ね。脱水症状になるといけない。心配するから、毎晩「生きているぞ」って東京の子どもに電話をかけてね。降圧剤を3種類飲んでいるの。だからいま120から130ぐらいなんですよ。

櫻田 ちょうどいいですね。

杉本 僕はもう、ぼっくり死にますから。

菊川 ぼっくりいらっしゃる前に、おやりになることがまだいっぱいあるんでしょう。

杉本 だから僕はいつも日本酒をね、200cc、毎晩飲んでいるんだ。牛乳瓶1本分。だからね、一升瓶、だいたい10日に1本の。

菊川 またね、先生は会うたびにお話が違う。ひと月前にはね、3日しかもたないっておっしゃったんですよ。その次に5日だって言って。このあいだ先生、「四合瓶なんてぺろりだよ」って。

杉本 そうなんだ。あれ一升瓶だったね、液体っていうのは重いだろう。僕は鎌倉でこのあいだも「にんべんのだし汁」を買って、やっぱり液体っていうのは重いね。

菊川 瓶は重いですよ。

高橋 まだお話をなりたいことが沢山おありだと思いますが、残念ながら時間がなくなりました。これで終わらせていただきます。両先生、ありがとうございました。聞き手の皆さんもお疲れ様でした。杉本先生、細谷先生、これからもお健やかに過ごしてください。

あとがき

このヒヤリングは、冒頭の聞き手の発言にあるような主旨で、2回にわたり行われた。協議会の終焉を前にして、タイトルにもあるように、協議会とともに歩んでこられた両先生の五十七年（タイトルは六十年としたが）の道のりを振り返り自由にお話いただいた。

お二人のお話は、過去の「経済学文献を語る」などでの発言と重なる部分もあり、また「冗漫」に感じられる箇所もあろうかとも思うが、当時の雰囲気を感じていただければと、ヒヤリング当日のやり取りを、あまり手を加えずに復元した。この意図を汲んでいただければ幸いである。

なお、第1回目は細谷先生に対して秋山と高橋が、第2回目は杉本・細谷の両先生には、上記2名と菊川、松本、櫻田の5名が聞き手となった。

第1回目 2008年7月8日 細谷先生宅（武蔵小山）

第2回目 2008年7月29日 レストラン サン・アロハ（片瀬）

ヒヤリングは2回にわたったが、読みやすさを考慮し、1回という形に構成した。ご了承ください。

（菊川 秀男）